興津文二郎覺書　單

H2
44

420
442

東京帝國大學圖書之印

B 23475

興津又二郎覚書写

付紙ニ佐野ハ赤松下野之佐野 右京亮ノ曲之氏ハ赤松ノ分ノ定致尚 佐野ヲ中津之定致針存ス

一 興津右兵衛景通者駿州興津之産ニ而今川義元公
ニ被召仕駿州清見関ニ居住ス永禄三庚申歳織田信長公
御合戦尾州之内桶狭間五月十九日 義元公御戦
死之刻右兵衛防戦仕四十三歳ニ而討死之由 牌名千山
宗及居士と申候

一 興津又八父右兵衛討死之砌三歳ニ而母ニ連為養育
播州及牡宗名ハ孫五右衛門京一と相段母方之一族
播州ニ佐野官十郎と申者有之ニ付随 赤
松左兵衛尉様ニ御奉公ニ罷成天正九辛巳歳ニ千
石ニ而為御領地 赤松家之御忠書肥後国ニ而五
右衛門方ニ罷下ス 天正十三乙酉年四月頃 秀吉公

藏書
文林堂刊行

赤松家ニ於阿波ニ御加増被下願之砌阿波ニ而
ニ居城於阿波守ハ五左衛門ニ而赤松家ゟ三百石御加恩
所ゟ御證書纔後ハ五左衛門方ニ在之年阿州御
領地郡代ニ被仰付慶長之頃近江国渭津ニ而
石ニ居住之由然ル処若君庚子歳之秋七月石田治部少
輔三成殿ハ赤松家御一味ニ而丹波小野木縫殿
介殿ニ御命令発向近国已下以催勢丹後国長岡越
中守忠興公之御居城田辺城御責ヶ被成御城主
忠興公ハ　家康公之為御先陣上杉景勝為
御退治奥州ニ御発向御留守ニ而　御隠居幽
斎并若公御館戦御籠城之処　忠興公
ゟ御家頼麻三右衛門を田辺城ニ為御使被差

越中守方大軍之囲難忍入日を送ル居中ハ三左衛門段
々候而右衛門母乃之縁有之由傳有之者ニ而赤松家
之御陣場ニ参り候而右衛門陣屋ニ致参詣口上命之令
辞退致中ニ付赤松家之物頭井門藤太左衛門差合
御城内江陰ニ以テ御櫓ニ矢文を通し密望
然井門為引候此方ゟ人数を遣し三左衛門を御城
内江差入レ申候弥堅固ニ及候所更ニ　幽斎公井門
件ヘ連名之為御礼書弐為頂戴被相余其
之関東ゟ折立も其節長五年赤松家御滅亡
以後家中離散ニ而其人々牢浪之節　幽斎公
江被召　忠興公ニ而被召抱豊前国ニ而被鎮慶長
六年丑年御知行被下乃拝領ハ元和七年酉年

忠興公御隠居三斎宗立公と被遊御改名御五男
門より御附候て刑部殿へ御付宗也と改法様にて被召仕候
御家督　越中守忠利公より不相替御懇ニ被召仕
右九様御所務中忠利公御隠居被遊ニ付御守
ニ而ハ別段加藤家所務の所務ニ御預り被為在御勤
寛永九壬申歳肥後国江御入国御供ニ而被召抜覚
永十八辛巳年九月二日ニ八十三歳ニ而病死仕候
一沖津九郎兵衛一友宗也嫡子文保右衛門事寺本
江被召仕候一石二被召慶十七壬子年　忠興公
江被召出新知被為拝領候　忠利公御代寛
永十四丁丑年冬肥前嶋原一揆蜂起之刻御供ニ而
戦場同十五戊寅年二月廿七日攻城之刻細川家

一当家系図右衛門国許ニ有之海手石垣出ニ而
組討ニ働ニ而討死仕候　義心英士居士と申候
一沖津文助宗也次男右係五右衛門京吉文同前ニ
寺本江被召抜慶長十七壬子年　忠興公江御由緒
ニ而御知行被為拝領候元和七年　忠興公御
隠居之節文保右衛門儀被召仕候御文名簿
五右衛門と更ニ改下寺ニ而文助義保五右衛門京吉ニ
改中川ニ而　忠興公御隠居御供ニ而寺本中津
城江被召中仕寛永元甲子年三月肥前長崎江御用
ニ而寺本ニ横田清之進と申者之係五右衛門と被召出越
中守清之進江論仕掛ニ清之進ニ討果申候一旦限
三斎公御耳届ニ遊横田仕様不宜趣ニ而彼者家

候其上御親類江御進挿之儀者太守様ニ御免無之
而勤中ニ付而ハ思召御座有之ニ付御名字之儀ニ
忠興公之直ニ文字御拝領有之候ニ付忠興様ニ而御改革
候忠興様ニ而細川中務之御唱ニ而細川中務由
忠興と名乗中務と相成候事ニ有之候思召
候由ニ而忠興と文字改号中務ニ而寛永十四年御家
一揆之節細川中務少輔立孝公ニ而御出陣ニ而立孝
公御帰陣之間内ニ而同十五年二月廿七日御出陣ニ而
御帰陣一周之年時ニ而者五十日門方之服ヲ被施候旨
打延候年之御引取被思召御悔中様ニ而御手應候
三斎公江戸御留主居役江相頼御伴江戸之
御居中ニ付正保二乙酉年十二月二日於江戸死去八代殿

三斎公御逝去之節殉死之者有之候同年
肯殉死之願ヲ被相留候光利公江者願ニ付御免
之節江戸表京都江飛脚又次郎室ニ付其上吉植
月二日大徳寺塔中於高桐院三斎公御三回
忌御法事御執行於寺山為尾張遂殉死中ニ付江
戸被差出候　光利公并姫田加賀守様稲葉
能登守様御殉死ニ者江戸表ニ而御暇之者江戸ニ而
以後御盃之御小袖御拝領被殉死之節
右御逝去之御様子ニ付又兵衛江戸表ニ而
被下候書之略指出候ニ付而相渡候ニ付又
二郎右衛門中ニ付

高桐院清巖

文林堂刊行

五嶽雖高立下風十方界絶如同古来不隨諸山色　共同云字有
一朶巍巍然聳碧空

細川光利
ぬきとめし峯より遠の京の原かゞふたつさけの玉緒の白玉

堀田正盛
あめが下にたぐひなき名を呉竹の清見哉
此五句の本歌乃字有之

稲葉信通
孤峯ひとつ世を思ふ山の峯のたかき言はゞ何と答へん

烏丸資慶
誰か世に今幾尺の年さひき住吉の峯の松の末

裏松資清卿
契おきの友なき峯の末の言葉[illegible]峯の上の松も[illegible]

東福長老
只孤峯のけむりと消果て富士とふたつなき名を残すらん

建仁長老
さりとてもおしき身すぎ程は[illegible]を知ぬうき世に知る身なるらん

相国長老
ぬしの山けふたちのぼりハ千々の秋ときはなる色も見えんといふ心の峯

天龍長老
さふることも世にたてゝの露ぞめでたくたぐひなき名を見まほしき

南禅天寿長老
みちしるべ峯にいたりし孤山の形しつかにまた逢ひ見るさかひ

妙心長老
ゆきかゝる雲は孤の峯の上ふかく名をとゞけて絶えぬとぞ見し

文林堂刊行

深川堂了立石
身を立名を以後世に顕候（父母の名をも顕す）ゆへ孝の始也

一 沖津半三郎宗也三男后改大夫宗行文宗大夫寄
合ニ被下候引同時之被仰付慶長十七壬子年忠輿
公被召加御知行百石頂戴忠輿公御代三斎公御
加増被下御奉行数ケ年相勤申候寛永五生后
年五月廿八日病死仕候倅治五大夫若年ニ付跡目無遠
寛文十一辛亥年十二月五日ニ病死仕候男子無之絶

一 沖津忠太宗也四男后四郎左衛門景時文宗と同
時ニ奉公ニ被下慶長十七壬子年忠輿公
被召出以後御知行拾五石頂戴元和元乙卯年

其大坂御陣之御供ニ付江戸迄御使ニ被成
忠輿公種々御陣家康公ニ被成御目見御先
陣藤堂和泉守高虎公御備御加ニ被成
則藤堂家御陣所御加ニ成半三月合戦　三斎公御合
戦之時　忠輿公御馬上御自身御手負被成
奉忠太御側不存相働申候依御陶器上御
加増被下然共昔左之由ニ而御加増返上仕御暇奉願
以後不届之者由ニ而御暇被下十月石以上主君ヲ
御持被成方ニ御渡候体其奉ヲ了違被召候
之寺本田長門と申政勢州桑山ニ被誠
本多下総守様ニ御奉公ニ被召御知行なし
其以後　不関多出三ケ所町奉行数ケ年相勤

申候　寛永十四丁丑年之冬於京一揆之節西国大
名就急度御下知黒田右衛門佐様　細川越中
守様江戸御国許ニ而被為立朱海路馬路
細川様之黒田様ゟ一日も以前御渡り之旗律
候得先達而馬を出し以前出立　細川様ニ而
御家恩奉請居候ニ付京都ゟ又兵衛江
右之段申　金子七百両并先銭候根中申聞則又三郎も
同前右御恩奉請候所早速金子七百両又四郎太
兵衛門方へ差し同左衛門中様右之人馬三四百
追之山里ニ隠置　細川様御名之三郎差出御
用立候而其上山水口宿ニ而黒田様之　細川様御通
越ニ被成故御城大分之手柄御感被成　越中守

様ニ御意之趣承候中右四郎左衛門次男四郎兵衛
義其節之人ニ而江戸帰候節ニ被下候年右兵衛後仕罷候も
被居申候而其以後紀後国江被下申罷身津左衛門
世後　越中守様利公御代之被成候数年
相勤申候其後従り其以後紀州ニ而寺立ニ名
跡可申候先祖四郎左衛門相働之対し被為候
堂中ニ来り
一　中津八助宗文五男三男ニ被成候怪我故仕足
ヲ痛一生其行時仕寛文十二壬子年十月廿
六日ニ紀後ニ而病死仕候宗春と申候由
一　中津又次郎宗右男幼少之時より母ニ付候而肥後
江下り居申候母之九條様諸大夫谷山民部少

文林堂刊行

備後ニ而ハ居て民部少輔殿山所ニ而中ニて
忠利公御代ニ御側 御出生三千石近ク被下候事
一右又次郎ニ実子又ハ居候而播州佐野官千郎
孫市郎右衛門を表向ニ而仕候市郎右衛門と名乗
其吉田喜兵衛孫母方長門毛利秀包娘ニ而市
郎右衛門と其孫ニ而法庵候
一右之通ニ付只今細川家越前守不和ニ候砌
名乗誰被仰付 細川家江中立申候様ニ祖父
市郎右衛門中ニ立申候事

右之通日記ニ相見申候事

元文二巳年六月 真清市郎左衛門

寺元登模

一真清宗吉情候事 寿孫五兵衛京香嫡子ニ而
左衛門一貞 寛永元甲子年十月十九日病死
禅入一定居士
次男三孫氏者宗土ニ而出生ニ而由文左衛門候て
中郡ニ定ル 文左衛門候法事息下筆候事

右書面本紙之侭不加添削写之

寛政八丙辰年四月

寺元小浦太
良信

文林堂刊行